

## ヒッタイト語動詞接辞 *-nu-* の他動性明示用法

— 「被使役者を明示しない使役」の機能は存在するか—

大亦菜々恵

omata.linguistics1@gmail.com

キーワード： ヒッタイト語 使役接辞 他動性明示

### 要旨

本稿では、ヒッタイト語で主に使役の機能を果たす *-nu-* 動詞派生接辞が他動詞についての場合に「被使役者を明示しない使役」の機能を果たすと伝統的に言われてきた4つの動詞を扱う。それぞれの語について全ての用例を分析した結果、明らかに被使役者を介在していない例が見つかり、最終的に使役の機能を果たしているとする根拠は見当たらなかった。そして、大亦 (2016) で提案された、他動詞用法につけられた *-nu-* は他動性の明示の機能を担っているという説が妥当であることを示す。

### 1. はじめに

ヒッタイト語<sup>1</sup>には名詞や形容詞、動詞につく *-nu-* という動詞派生接辞が存在する。この接辞の機能は使役である説明されてきたが、特に他動詞につくと、語基の動詞と派生語が全く同じになるなどして、*-nu-* という接辞の機能を捉えることが難しい場合がある。先行研究の Kronasser (1966) はこのような *-nu-* 使役接辞の多くを全く意味なく付けられたものと扱っている一方、Luraghi (1993) は意味なく付けられるのはおかしいので微妙な意味変化があると主張しており、*-nu-* の解釈には様々な議論がなされてきた。

大亦 (2016) の調査では、他動詞に *-nu-* 派生接辞がついた場合を中心に再考し、Kronasser (1966) が主張するような、*-nu-* 接辞が意味変化をもたらさずに使用されている例が確かにあることを検証し、さらにその多くは語基となる動詞が他動同形、もしくは中受動態で自動詞用法を持つものであり、MH 以降になって自動詞と他動詞を区別するために *-nu-* をつけるようになったという説を提案した。しかし大亦 (2016) の調査は未完成の辞書を用いて行ったものであったので、一部の動詞について十分に用例を集めることができず、特に「3.7 被使役者を明示しない使役」に相当する動詞群の分析が不完全であった。本稿ではそれらの動詞を中心に、2017年にミュンヘン大学の *Hethitisches Wörterbuch* の為のコーパス資料を利用させていただき、網羅的な用例を収集して分析した。そして結論として、*-nu-* が「被使役者を明示しない使役」のような機能

<sup>1</sup> ヒッタイト語は紀元前1600年から1200年までの約400年間アナトリア地方(現在のトルコ)で使用された、文証されている中で最古の印欧語であり、アナトリア諸語に属する。文証されている400年の間に文法や語法がかなり変化していることから時代区分がなされており、古期ヒッタイト語 (OH: Old Hittite)、中期ヒッタイト語 (MH: Middle Hittite)、新期ヒッタイト語 (NH: New Hittite) と分けられている。

を果たしているとする根拠は見当たらず、-nu-は他動性の明示の機能を担っていると考える方が妥当であるということを示したい。

## 2. 先行研究

形容詞（と一部の名詞）と動詞には-nu-という動詞派生の接尾辞をつけることができ、印欧祖語の\*-new-/nu-に由来する(Klockhorst 2008: 703)。ヒッタイト語では-nu-は主に形容詞や自動詞につくことで結合価を1つ増やし、「～にする」、「～させる」という意味になって使役の機能を果たすと言われてきた<sup>2</sup>。(1)a, bは形容詞に-nu-が付く場合、(1)c, dと(1)e, fは動詞（自動詞）に-nu-が付く場合の例である。

- (1) a. harki- 「白い」  
 b. harganu- 「白くする」  
 c. hat- 「乾く」  
 d. hatnu- 「乾かす」  
 e. mema- 「話す」  
 f. memianu- 「(誰かに) 話させる」

しかし、他動詞に-nu-がつく場合は結合価が増えることはなく、対格項や与格項などが増えて被使役者が追加されるようなことがない為、この場合の-nu-の機能に関しては不明な点が多かった。Kronasser (1966) はこのような-nu-使役接辞の多くを全く意味なく付けられたものと扱っていたが、Luraghi (1993) はそのうちの4つの動詞が「被使役者を明示しない使役」であると主張しており、近年の文献学的研究のなかでもドイツ語で“lassen<sup>3</sup>”をつけて訳されることが多かった。(2)から(5)にその4つの語基と派生語を示す。Tischler (2008)やHEG<sup>4</sup>に訳が載っている場合はそれも記載する。

- (2) a. has- 「産む」 ‘zeugen, gebären (Tischler 2008: 50)’  
 b. hassanu- ‘zur Welt kommen lassen (Kronasser 1966: 445)’
- (3) a. kank- 「引っ掛ける、量る」‘hinhängen, aufhängen; abwiegen, zuteilen (Tischler 2008: 78)’  
 b. gankanu- ‘abwägen lassen (Kronasser 1966: 446)’
- (4) a. karp- 「持ち上げる、持ち去る」‘heben, wegtragen’, auch ‘unterwerfen’, MP ‘(beendet werden/sein und ) sich erheben (Tischler 2008: 81)’  
 b. karpanu- ‘aufheben (und wegbringen) lassen (Tischler 2008: 81)’
- (5) a. tekkussai- 「見せる、現れる」‘(sich)zeigen, presentieren (HEG T: 302)’  
 b. tekkussanu- ‘zeigen (lassen), offenbaren; vorstellen (lassen) (HEG T: 302)’

<sup>2</sup> Hoffner and Melchert (2008: 175-179) (以下GHL)を参照。

<sup>3</sup> ドイツ語でも文脈から然るべき人など被使役者が明らかな場合、被使役者を表さない使役としてlassenを使うことができる。例: *Er ließ den Mann erschießen.* (彼はその男を射殺させた。)

<sup>4</sup> Tischler, J. 1977ff. *Hethitisches Etymologisches Glossar.*



4 nu=tta=kkan URU<sub>H</sub>attuši ANA LÚ<sup>MEŠ</sup> URU<sub>H</sub>ayaša=ya aššuli ištarna  
 5 **tekkuššanunun** nu=tta a[m]mel NIN<sub>9</sub>-YA AŠŠU[M] DAM-UTTİM ADDIN  
 6 nu=tta KUR URU<sub>H</sub>atti hūmanza KUR URU<sub>H</sub>[Hay]aša KUR.KUR<sup>MEŠ</sup>-ya  
 7 hūmanteš arahzeneš antūri[e]š arḫa ištamaššer  
 8 nu=za zik <sup>m</sup>Hukkanāš <sup>D</sup>UTU-ŠI=pat AŠŠUM BĒLŪTIM šāk  
 9 DUMU-YA=ya kuin <sup>D</sup>UTU-ŠI temi kūn=wa=za hūmanza šākdu  
 10 n=an=kan ištarna **tekkuššami** nu=za zikka <sup>m</sup>Hukkanāš  
 11 apūn šā[k]

日本語訳<sup>5</sup>

1 我が太陽 Suppiluliuma、Hatti 国の王は次のように言う  
 2 あなた、Hukkana を、私はここに最後の犬として  
 3 迎えた。そして、私はあなたを優遇した。  
 4 Hattusa の中で、そして Hayasa の人の中で私はあなたを好意的に  
 5 紹介させた (In Ḫattuša und inmitten der Leute von Ḫajaša habe ich dich in guter  
 Gesinnung vorstellen lassen)。そして私はあなたに私の女兄弟を妻として与えた。  
 6 そして Hatti 国全土、Hayasa の国、そして  
 7 全ての周り と内側の国々はあなたのことを聞いた。  
 8 あなた、Hukkana は王権に関して我が太陽のみを認めるように！  
 9 私が我が太陽と呼ぶ私の息子、「彼もまた全ての人はみとめるように！」  
 10 そして私は彼を内部で紹介する (**drinnen vorstelle**)。あなた、Hukkana は  
 11 彼をみとめるように！

続、KBo 5.3 i

27 našma=kan mān <sup>D</sup>UTU-ŠI kuedani anda idālu ištamašti  
 28 n=at=mu=kan mān šannatti n=at=mu UL mematti  
 29 apūnn=a=mu antuḫšan UL **tekkuššanuši**  
 30 n=an anda imma munnāši

日本語訳

27 もしくはもしあなたが我が太陽の関係する悪事を聞いたら、  
 28 それでももしあなたがそれを私に隠して、私にそれを言わなかったら、  
 29 そして私にその人を告発しなかったら、  
 30 そして彼（その人）を完全に隠していたら、

<sup>5</sup> 訳は G. Wilhelm (ed.), hethiter.net/: CTH 42 (INTR 2013-02-24)を参照。

この文書の中では i 5 行目、i 29 行目に *tekkussanu-*、i 10 行目に *tekkussai-* がみられるが、それぞれ *-ta* (あなたを)、*-an* (彼を)、*apūn antuḥšan* (その人を) と、どれも対格目的語をとっている。Friedrich (1930: 138)によれば、当時は *tekkussai-* という語はこの他に、破損していて文脈が不明な KBo3.60 i 5(NH)と、今回とほぼ同じ他動詞用法の KBo 4.12 i 12(NH)の用例しかみつかっていないため、*tekkussai-* は他動詞と考え、*tekkussanu-* の方には“lassen”をつけて訳をした方がよいと判断したようである。そのため i 10 行目の *tekkussai-* は王が自ら息子を紹介しているが、i 5 では役人のような、しかるべき被使役者を介して紹介しているとしており、その訳が今回参照した 2013 年の翻訳でも採用されている。しかし、Friedrich も指摘している通り i 29 行目の文脈では間に誰かを介して告発するというように訳するのは不自然であるため、この箇所では“lassen”をつけずに訳し、また *tekkussanu-* と *tekkussai-* の意味は混同されがちであったのではないかと述べている。これが、多くの辞書で *tekkussanu-* が“zeigen (lassen)”とされている背景であると考えられる。

一方、Kronasser (1966: 452)は *tekkussanu-* を“Übercharakterisierte (過剰特徴付け)”として扱っており、その根拠として他の古い印欧語の例を挙げている。例えば、gr. *δείκν-νν-μι* ‘zeige’ などは同じ-nu-派生語でも使役の意味はなく、また ai. *des-ay-ati* は使役派生形であるが意味は‘läßt zeigen’ではなく、派生語基の *disāti* “zeigt”と意味は同じである。また、使役派生形の *toch.B lakä-sk-* は“zeigen” という意味であるが、派生語基の *lak-* は“sehen, schauen” という意味であるため、使役の意味が捉えやすいことを述べている。

### 3. 1. 2 *tekkussai-*、*tekkussanu-* の用例

今回の調査では *tekkussai-* は 10 例ほどあり、そのうち文脈のわかる 5 例は自動詞で‘sich zeigen’ (姿を見せる、現れる) という使われ方をしていることがわかった。

- (8) HKM46 (200-201) Vs. (MH, 手紙)  
 8 n=as=kan mān INA KUR <sup>HUR.SAGx</sup>Šakaddunuwa  
 9 parēan paizzi  
 10 mān EGIR-pa kuwatga  
 11 wahnuzi n=as=kan KUR-ya  
 12 anda uizzi nu=ssi EGIR-an  
 13 nawi kuitki  
 14 **tekkussiyaizzi**

Hoffner (2009:174)訳

Whether he has gone over (to) the land of Mt. S(h)akaddunuwa, or perhaps has turned back and come into the territory, no trace of him **has shown up** yet.

(9) KBo25.1 (OH, 占い・Lebermodelle)

b.1 BE še. 2-ma kima MUŠ itguru

2 (Heth.) LU<sup>U</sup>KÚR-as tekussizzi

3 [t]ák-su-ul[...]

De Vos (2013: 178-180)訳

1 BE. 2 Seiten (sind da), und sie sind wie eine Schlange verschlungen;

2 ein Feind zeigt sich,

3 [kein?] Frieden [ ].

*tekkussai*-には(7)のような他動詞で「紹介する」という用法が 2 例しか存在せず、(8)や(9)のような「現れる」というような自動詞用法のほうが、数が多かった。特に唯一の OH の用例である(9)は自動詞用法であった。一方、*tekkussanu*-には 50 ほどの用例があり、(7)で挙げた「紹介する」「告発する」といった用例の他、次の(10)のような、「(神が自分の力を) 見せつける」という用法が多く見られた。

(10) KBo3.4 A ii

15 mahhan=ma iyahhat nu GIM-an INA<sup>HUR.SAG</sup>Lawasa ārhun

16 nu=za<sup>4</sup> IŠKUR NIR.GÁL EN-YA parā handandātar **tekkussanut**

17 nu<sup>GIŠ</sup>kalmisanan siyāit nu<sup>GIŠ</sup>kalmisanan ammel KARAS<sup>HLA</sup>-YA uskit

Beal (2000:85)訳

When I had gone and when I had arrived in Lawasa, the victorious Stormgod, my lord, **showed** his divine power. He shot a lightning bolt. My troops saw the lightning bolt...

この箇所は Mineck (2006: 255) や Grelois (1998: 79)によっても訳されているが、神が誰か他の被使役者を介して「神の力 (*para handandatar*)」を表しているとは捉えにくいのか、*lassen* や *let* を伴う訳をしている先行研究は見当たらなかった。

その他、*tekkussanu*-の訳に関しては、被使役者の存在を示すような、*lassen* を使った訳をされてきた用例は、(7)にあげた KBo 5.3 i 5 しか見当たらなかった。そのため、*tekkussai*-に自動詞用法が見つかり、大亦 (2016)で *-nu*-が他動性明示の機能しか果たさないこともあると明らかになった今となつては、*-nu*-が被使役者を明示しない使役の機能を果たしていることの根拠は薄い。これまで「(役人に) 紹介させた」と訳されてきた KBo 5.3 i 5 の例も、*lassen* をつけずに「紹介した」と訳すほうが適当であると思われる。

このため、大亦 (2016)で「*-nu*-をつけても意味が変わらない場合、自動詞としても他動詞としても使われる動詞に、他動詞であることを明示するために *nu*-がつけられている場合が多い」

ことを明らかにしたが、*tekkussanu-*という動詞もこの考えに当てはまると考えられる。

### 3. 2 *karpanu-*

*karp-*: OH~NH, 能動態、中受動態

*karpanu-*: MH~NH, 能動態のみ

*karp-*は能動態で「持ち上げる、持ち去る」‘heben, wegtragen’, auch ‘unterwerfen’<sup>6</sup>と訳され、中受動態で「終わる、そびえ立つ」‘(beendet werden/sein und ) sich erheben’<sup>6</sup>と訳される。一方 *karpanu-*は「持ち上げさせる、持ち去らせる」‘aufheben (und wegbringen) lassen’<sup>6</sup>と訳されてきた。*karp-*には数百以上の用例が見られるが、*karpanu-*は7例ほどしか存在しない。

(11) KUB 33.106 iii (NH, 神話)

- 35 A-ni=kan kwiš<sup>NA4</sup>ŠU.U-ziš  
 36 anda miēšta UL=an šakti n=aš :maltaneš GIM-an  
 37 šarā **karpīšket[t]ari**

Rieken (2009)<sup>6</sup>訳

- 35 Den Diorit, der im Wasser gewachsen ist,  
 36 kennst du ihn nicht?  
 37 Er **erhe|b|t (sich)** wie ein *maltani*.

*karp-*は他動詞でよく用いられるが、中受動態の例も多く、(11)は中受動態で「そびえ立つ」の用法で用いられている例である。

(12) KUB 7.41 iv

- 42f mān zennizzi nu=kan LÚHAL aniyantan ANA URUDU KAXPA anda dāi serrassan DINGIR<sup>MEŠ</sup>  
 dāi n=at **karpanuzi**  
 44 n=at LIL-ri pidāi

Miller (2008: 217)訳

- 42f Sobald er fertig ist, legt der Ritualist die Ritualausrüstung in den Behälter, er setzt die Götter  
 drauf, er **nimmt es auf**  
 44 und er bringt es in die Steppe.

(12)の例は *karpanu-*の例で、Luraghi (1993: 167)などが被使役者を明示しない使役の例として挙げていたものである。Luraghiはこの用例を、LÚHAL (Ritualist) という目上の立場の人が、目

<sup>6</sup> E. Rieken et al. (ed.), hethiter.net/: CTH 345.I.3.1 (TX 2009-08-31, TRde 2009-08-30)

下のものに命令して持ち上げさせていると解釈していた。しかし、KUB 7.41 はほとんど完全に再建されて全体の意味がわかっている儀礼の文書であるが、Miller (2008: 206-217) などからわかるように、この儀礼は一貫して一人の男性(<sup>LU</sup>HAL)によって遂行されているため、この解釈は明らかに誤りであり、Miller (2008) などでも ‘lassen’ を伴うような訳はされていない。

他に断片ではないものとして、KUB 33.24 iv 23<sup>7</sup> と KUB 36.83 i 28 にも *karpanu-* の用例があり、こちらは ‘lassen’ をつけた訳をされている。次の(13)の例では、天候神は格上の存在なので、命令して持ち去らせるという訳語が間違いとも言い切れないように見える。

- (13) [n=an<sup>d</sup>]M-aš LUGAL-i *karpan[ut]*  
Der [Wet]tergott lie[ß es] zum König wegbringen

しかし大亦 (2016) で取り上げたように、*laknu-* などの動詞では、語基の *lak-* は OH では能動態で「倒す」という他動詞、中受動態で「倒れる」という自動詞として用いられていたものの、MH からは *-nu-* 派生形の *laknu-* によって *lak-* の「倒す」という他動詞の用法が完全に置き換えられ、*lak-* には自動詞の用法しか残らなくなるといった現象が確認されている。*karp-/karpanu-* も同様に、中受動態で自動詞用法を、*-nu-* 派生語で他動詞用法を担う方へ変化が進んでいった可能性が考えられる。

また興味深い例としては、KUB 45.58 iii 11 にも *karpanu-* の用例が存在していることで、これは NH のフリ語対訳の祭式文書である。KBo 3.5 の馬術文書など、フリ語の影響を受けた文書がしばしば正統なヒッタイト語から逸脱していることはよく知られるが、KBo 3.5 にも *parh-* 「駈歩させる」に対して、全く意味が同じ *parhanu-* という動詞が現れていることを大亦 (2016: 229-230) で確認した。フリ語は能格言語で自動性と他動性が動詞の形態で明確に表示されることが知られているが、他動性を明示するために *-nu-* をつけるという現象が、中期から深まるフリ語の影響によるものである可能性も浮かび上がった。

### 3. 3 *gankanu-*

*kank-*: OH~NH, 能動態、中受動態  
*gankanu-*: NH

*kank-* は「引っ掛ける、量る」‘*hinhängen, aufhängen; abwiegen, zuteilen*’ と訳され、*gankanu-* は Kronasser (1966: 446) など「計らせる」‘*abwägen lassen*’ であると解釈されてきた。*kank-* のほとんどは能動態で他動詞として用いられるが、KUB 55.56 iv 10 (NH, *kán-ga-ah-hu-ut*)、同 iv 2 などでは、中受動態が用いられている。中受動態の語形は用例が少なく文書も破損しているので語義や用法などは不明である。*kank-* は百以上の用例が見られる一方、*gankanu-* は 5 例のみで、そのうち文脈がわかるのは KUB 21.27 iii 42 (NH) のみである。

<sup>7</sup> Rieken, E. et al. (ed.), *hethiter.net*: CTH 325 (INTR 2012-05-01)



(14) KUB 21.27 iii<sup>8</sup> (NH, 祈禱文書)

- 39 nu uwami ANA <sup>d</sup>Liliwani GAŠAN-YA  
 40 ALAM KÙ.BABBAR ŠA <sup>m</sup>Hattušili <sup>m</sup>Hattušiliš mašiwanz(a)  
 41 SAG.DU-ZU ŠU <sup>M<sub>1</sub>EŠ</sup>-ŠÚ GÌR <sup>MEŠ</sup>-ŠÚ ŠA GUŠKIN iyami  
 42 arḫaya[n=m]a=kan **kanganumi**<sup>9</sup>
- 39 werde ich später der Lelwani, meiner Herrin,  
 40 eine silberne Statue des Hattušili – ebenso groß wie Hattušili,  
 41 seinen Kopf, [sei]ne Hän[de] (und) seine Füße aus Gold – herstellen (lassen).  
 42 Ich werde s[ie a]ber gesondert **abwiegen lassen**.

(14)の用例も、Luraghi(1993: 167)などが、被使役者を明示しない使役の存在の根拠としてきたものである。この文書は女王ブドゥヘパの祈禱文書の一節で、主語である‘ich’は女王であり、自分で像を量るのではなく召使などに頼んで量らせるため、使役接辞の-nu-が付けられていると Sürenhagen(1981: 116)などでも解釈されてきた。しかし、41行目の iyami が‘herstellen (lassen)’と訳されているとおり、女王などが直接自分の手で行わない場合でも、-nu-などで使役であることを明示する必要はない。そのため、-nu-がついても意味変化が起こらない用例を数多くみてきた今となつては、-nu-が被使役者を明示しない使役の機能を果たしているとは言い難いと思われる。

kanganu-は最も説明づけが難しいが、kanganu-自体の用例も NH でわずかに数例しかみられないこと、また NH ではわずかに kank-に中受動態で自動詞用法が見られることから、karpanu-や laknu-などと同様に、-nu-によって他動詞であることを明示する習慣ができつつあった可能性がある。

#### 4. 結論

これまで「被使役者を明示しない使役」として、ドイツ語で‘lassen’などをつかって「～させる」と訳されてきた4つの動詞を分析した結果、(12)など文脈から明らかに被使役者を介在していない用例が見つかり、また、他動詞としての用法しかないと考えられていた語基には、どれも能動態や中受動態で自動詞用法を持つことが明らかになった。大亦 (2016)では、MH以降、自動詞か他動詞かを明示するために-nu-派生を行うようになったとする説を提案したが、本稿でも、-nu-に語義の変化を求めて‘lassen’などを無理につけて訳すよりは、-nu-が他動性明示の役割を果たしていると考えの方が妥当であるという結論に至った。

<sup>8</sup> E. Ricken et al. (ed.), hethiter.net/: CTH 384.1 (TX 2015-08-28, TRde 2016-01-02)

<sup>9</sup> 42行目には対格目的語が明示されていないが、ヒッタイト語はコンテキストから判断が可能であれば対格目的語をしばしば省略することが知られている。(GHL: 302)

## 略号

CHD = The Chicago Hittite Dictionary, GHl = A Grammar of the Hittite Language, HEG = Hethitisches Etymologisches Wörterbuch, HKM = Hethitische Keilschrifttafeln aus Maşat, HW<sup>2</sup> = Hethitisches Wörterbuch, KBo = Keilschrifttexte aus Boghazköi, KUB = Keilschrifturkunden aus Boghazköi, MH = middle Hittite, NH = new Hittite, OH = old Hittite, PRET = preterite (他は Leipzig Glossing Rules に依った。)

## 参考文献

- Beal, R. (2000) The Ten Year Annals of Great King Mursili II of Hatti. In: *Context of Scripture*, vol. 2: 82-90. Leiden: Brill
- De Vos, A. (2013) *Die Lebermodelle aus Boğazköy*, (StBoT Beih. 5). Wiesbaden: Harrassowitz.
- Friedrich, J. (1930) *Staatsverträge des Hatti-Reiches in hethitischer Sprache. 2. Teil: Die Verträge Muršiliš' II. mit Manapa-Dattas vom Lande des Flusses Şeḫa, des Muwattalliš mit Alakšanduš von Wiluša und des Šuppiluliumas mit Ḫukkanāš und den Leuten von Ḫajaša (mit Indices zum 1. und 2. Teil)*, (*Mitteilungen der Vorderasiatisch-Agyptischen Gesellschaft* 34/1). Leipzig: Hinrichs.
- Gréois, J.-P. (1988) Les Annales decennales de Mursili II (CTH 61, 1). In: *Hethitica* 9 : 17-145. Louvain: Peeters.
- Hoffner, H. (2009) *Letters from the Hittite Kingdom*, (Society of Biblical Literature Writings from the Ancient World 15). Atlanta: Society of Biblical Literature.
- Hoffner, H. and Melchert, C. (2008) *A Grammar of the Hittite Language*. Winona Lake: Eisenbrauns.
- Kloekhorst, A. (2008) *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon*. Leiden: Brill.
- Kronasser, H. (1966) *Etymologie der hethitischen Sprache*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Luraghi, S. (1993) I verbi in *-nu-* e il loro valore causativo. In: O. Carruba (eds.) *Per una grammatica ittita*:153-180. Pavia: Iuculano.
- Miller, J. L. (2008) Ein Ritual zur Reinigung eines Hauswesens durch eine Beschwörung an die Unterirdischen (CTH 446). In: *Texte aus der Umwelt des Alten Testaments. Neue Folge. Bd 4. Omina, Orakel, Rituale und Beschwörungen*: 206-217. Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus.
- Mineck, K.R. (2006) Hittite Historical Texts II: "The Ten Year Annals of Muršili II: excerpts". In: Chavalas M.W. (ed.) *The Ancient Near East: Historical Sources in Translation*: 253-259. Malden: Blackwell Publishing.
- 大亦菜々恵 (2016) 「ヒッタイト語の使役機能を持つ接辞-nu-と通時的変化」『東京大学言語学論集』37: 217-238. 東京: 東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室.
- Sürenhagen, D. (1981) Zwei Gebete Ḫattušilis und der Puduḫepa. Textliche und literaturhistorische Untersuchungen. In: *Altorientalische Forschungen* 8: 83-168. Berlin: Akademie Verlag.

Tischler, J. (2008) *Hethitisches Handwörterbuch – Mit den Wortschatz der Nachbarsprachen. 2., vermehrte und verbesserte Auflage. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Bd. 128).* Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.

Tischler, J. (1977ff) *Hethitisches etymologisches Glossar.* Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.

Rieken, E. et al. (ed.), hethiter.net/: CTH 345.I.3.1 (TX 2009-08-31, TRde 2009-08-30)

Wilhelm, G. (ed.), hethiter.net/: CTH 42 (INTR 2013-02-24)

Rieken, E. et al. (ed.) hethiter.net/: CTH 325 (INTR 2012-05-01)

Rieken, E. et al. (ed.), hethiter.net/: CTH 384.1 (TX 2015-08-28, TRde 2016-01-02)

## The Use of the Verbal Suffix *-nu-* in Hittite to Mark Transitivity: Does “Causative without an Overt Causee” Exist?

Nanae Omata

omata.linguistics1@gmail.com

Keywords: Hittite, causative suffix, marker of transitivity

### Abstract

There are four derivatives in the *-nu-* suffix in Hittite, of which the suffix has been traditionally interpreted as a ‘causative marker without an overt causee’, because those forms are derived from transitive verbs. This paper reexamines those *-nu-* derivatives. A survey of all the examples of each verb shows that there are cases where there is no causee in the context, for which I could not find evidence that *-nu-* actually has causative function. On these grounds, I argue that *-nu-* is suffixed to transitive verbs in order to mark their transitivity overtly.

(おおまた・ななえ 東京大学)